

# ベランダバードウォッチ 2018 年夏の報告書

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木

今年も市街地上空をヒヨドリの群れが続々と南を目指して移動していく季節になりました。今夏の関東地方は梅雨の期間が短く、7、8月は猛暑が続きました。このような夏は、住宅地周辺の鳥たちにとって住みやすかったのでしょうか。ベランダバードウォッチは、このような異常気象とも言える夏における鳥たちの生息状況を明らかにできたのでしょうか。一方で、この調査も始まって早14年が経過しました。以下に、ベランダバードウォッチを通して住宅地周辺の鳥たちの生息状況をまとめるとともに、今夏の調査状況について報告します。

## 調査地および調査状況

2018年夏の調査は、合計63名によって家での調査44か所、家の周りの調査49か所で実施されました。調査地数は、昨年と比べるとどちらの調査もやや増加しました(図1)。新たに調査地として登録された場所が家での調査では20か所、家の周りでは24か所が加わったため、「さえざりナビ」ユーザーの調査参加があったことが新規登録増加の一因になっていました。

次に、調査地域を北日本・東日本・西日本の大まかに3区分でみると、今年も東日本が29か所と34か所(家、周り以下同じ)でそれぞれ全調査地の7割近くを占め、その多くは関東地方で実施されました。一方で、西日本(12か所と10か所)と北日本(3か所と5か所)の調査地は少ないままでした。これは、バードリサーチの会員が関東地方に多いことも影響していると考えられます。

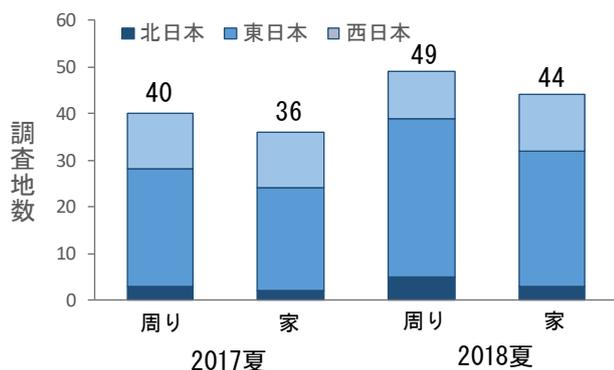


図1. ベランダバードウォッチの調査地数の2017年との比較

## 記録種と記録率

今期の記録種は、家での調査が80種、家の周りの調査が119種、合計127種でした(付表1)。家の周りの調査で記録種数が多いのは、調査期間が長く、調査範囲も広いために、冬鳥やさまざまな生息環境に生

表1. 2018年夏の家および家の周りの記録率上位10種

No.	家(調査回数:475回)	周り(調査回数:389回)
1	スズメ 0.80	スズメ 0.88
2	ヒヨドリ 0.58	キジバト 0.81
3	ハシブトガラス 0.55	ヒヨドリ 0.78
4	キジバト 0.48	ハシブトガラス 0.75
5	ムクドリ 0.47	ツバメ 0.70
6	ツバメ 0.46	シジュウカラ 0.67
7	シジュウカラ 0.46	ムクドリ 0.67
8	ハシボソガラス 0.42	ハシボソガラス 0.56
9	メジロ 0.27	カワラヒワ 0.45
10	ドバト 0.25	ドバト 0.41

息する種が記録されたためと考えられます。なお、どちらの調査も記録種数は開始当初の調査より多くの種が記録されています。たとえば、2007年夏の調査では家での調査は62種、家の周りでは83種の合計90種が記録されました。最近の記録種数の増加は、以前より調査地に水辺環境や里山などの一部が含まれ、調査地の環境が多様になったことが考えられます。

表1に記録率の高い10種を示しました。記録率は、各種の全調査地における記録回数の合計をそれぞれの全調査回数で除した値です。家での調査の上位10種は、スズメ、ヒヨドリ、ハシブトガラス、キジバト、ムクドリ、ツバメ、シジュウカラ、ハシボソガラス、メジロ、ドバトの順で、スズメを除くと記録率は第2位のヒヨドリでも0.6以下と家の周りの記録率より低い傾向があります。一方、家の周りの記録率上位10種は、スズメ、キジバト、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ツバメ、シジュウカラ、ムクドリ、ハシボソガラス、カワラヒワ、ドバトの順でした。順位こそ多少違いますが、どちらの調査もその顔触れはほぼ同じでした。このことは、過去の調査結果からも見て取れます。図2は、2005年から今夏までの14年間における記録率1~5位に出現した種を、記録率の順位ごとにまとめてみました。すると、どちらの調査も14年間常に1位を占めたのはスズメで

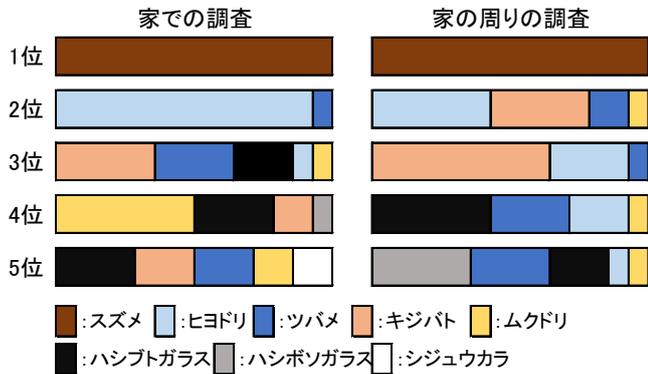


図 2. 家および家の周りにおける 14 年間の記録率上位種の出現状況

した。2位は、家での調査では13年間ヒヨドリが占め、家の周りの調査ではヒヨドリ(6回)またはキジバト(5回)が多く入りました。3位に入った種は、調査によって多少異なり、家での調査はキジバトやツバメ、ハシブトガラスが、家の周りではキジバトの回数が多く次いでヒヨドリが入りました。4位や5位は、年によって異なり、ムクドリやハシブトガラス、ハシボソガラスが交互に占めました。なお、図に示しませんでした。10位に入る種は、ウグイスやハクセキレイ、コゲラ、ドバトが多いことがわかっています。調査地は、ほぼ毎年継続して調査が実施された調査地が約30%含まれますが、年によって異なります。また、関東地方や東海地方など東日本の調査地が多いものの、調査地には近畿地方や四国、九州などの西日本や北海道も含まれます。それでも、記録率上位種の顔ぶれは、長期にわたってほぼ同じ10数種からなっていることが改めて見て取れます。したがって、これらの鳥たちが日本の住宅地周辺を代表する種と言えるでしょう。

### 家での調査からわかったこと

家での調査は個体数で報告されます。そこで、継続した調査地が増えてきた2007年から2018年の12年のうち、少なくとも8年以上調査された15か所のデータをもとに、主要な種6種の個体数指標を算出しました。解析には、TRIM(ver.3.53)を用いて、各年の調査地ごとの最多個体数を2007年の個体数を1として計算しました。図3から解析を実施した6種とも、年によって多少変動するものの、2018年の時点ではStable(安定)と評価されました。近年、日本における個体数の減少が危惧されているツバメやスズメも、ベランダバードウォッチの調査地では著しい減少はなさそうです。

なお、昨年の夏の報告書で、2005年から2017年の期間の個体数指標を解析したところ、ハシブトガラスは有意に減少と計算されました。今回の解析ではやや減少しているものの、Stableと評価されました。解析に用いた調査地は同じですので、おそらく2005年や2006年にいくつかの調査地で大きな群れが記録されていたために、減少と計算された可能性があります。

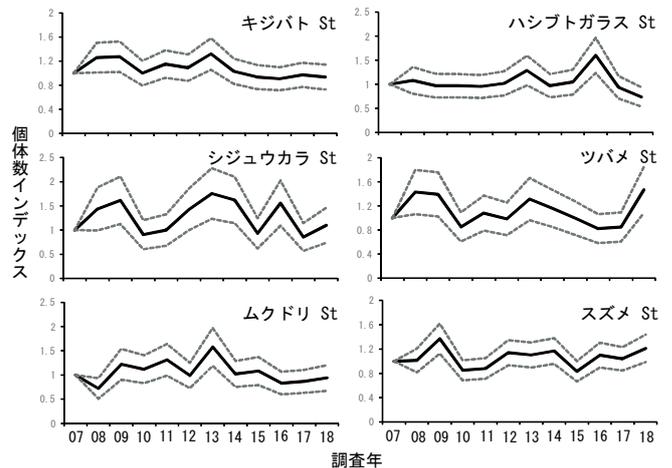


図 3. 家での調査による主要6種の12年間の個体数指標

### ムクドリとハシブトガラスの夏季の個体数ランク

家の周りの調査は、10日ごとに個体数を概数で報告します。今夏は、梅雨の期間が短く高温の日が続きました。このような夏は、鳥たちの生息状況に何か影響しなかったのでしょうか。そこで、夏季に群れで行動することの多いムクドリとハシブトガラスの10日ごとの個体数ランクを2017年と比べてみました(図4)。解析に用いたデータは、2017年と2018年のそれぞれ6月から8月下旬に調査された、全国の17か所の調査地の結果に基づいています。なお、家の周りの調査の個体数ランクには、「時々いる」という直接個体数の多寡を示さないランクがあります。個体数ランクを比較するため、今回の解析から除外しました。また、個体数ランクは、1~2羽と3~5羽を統合して1~5羽、21~99羽と100羽以上を統合して21羽以上とし、6~20羽のランクを加えて3ランクで解析しました。10日ごとの各ランクの調査地数をその調査時期の調査回数で除して記録率で表し、100分率で図示しました。

ムクドリでは、2017年と18年を比較すると明らかに7月下旬以降1~5羽の小さなランクの割合が減少していました。一方で、ほぼ同時期に21羽以上の群れの

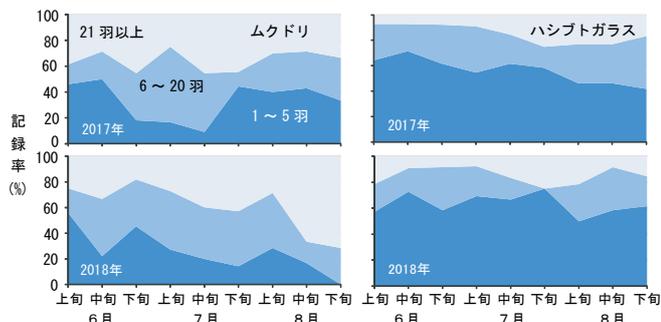


図 4. 2017年と18年夏季における家の周りのムクドリとハシブトガラスの個体数ランクの比較

割合が増加しました。特に、8月中旬以降は、前年と顕著に異なっていました。逆にハシブトガラスでは、ムクドリほど顕著な違いがなかったものの、7月上旬以降になると1~5羽の割合が前年より多くなりました。このようにムクドリとハシブトガラスでは、記録された個体数ランクの割合は異なった傾向が得られました。7月下旬以降に個体数の多いランクの割合が多いムクドリは、雨が少なかったことで繁殖成績が良く若鳥が多かったのかもしれませんが。あるいは、解析に用いたいくつかの調査地の近くに、新たなねぐらができたことで大きな群れが記録されたことによるのかもしれませんが。一方で、今夏はセミが少ないという新聞報道もありました(2018年8月21日付け西日本新聞)。ハシブトガラスの若鳥は、夏に公園などの緑地に多数群れてセミを捕らえています。とすると、セミが少ないために大きな群れが記録されなかった可能性も考えられます。しかし、こうした2年間の個体数ランクによる違いが、今夏の気象要因と関係しているのかどうか現時点でははっきりしません。来年以降も継続して調査を実施することで、今夏の状況がもう少し明確になるかもしれません。

### ガビチョウの増加

近年、日本ではガビチョウ類やソウシチョウなどの外国産鳥類が増加しています。この調査でも外国産鳥類が記録されています。ドバト、コジュケイなど日本に入ってきて長い年月が経つ種のほか、ホンセイインコやガビチョウ、ソウシチョウが記録されました。そこで、2016年から2018年に2年以上にわたって少なくとも5回以上調査が実施された家および家の周りの調査地から、ガビチョウの記録状況の変化をまとめました(図5)。

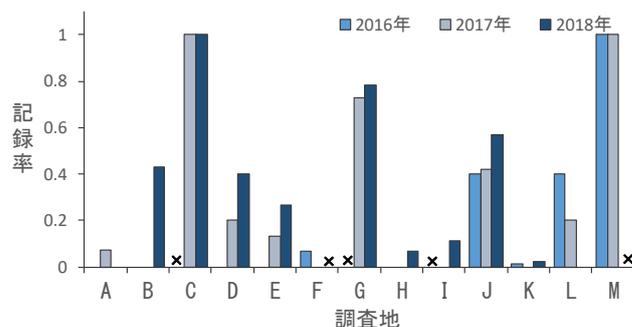


図 5. 2016-2018年のガビチョウの調査地ごとの記録率の推移  
×は未調査を表す。

ガビチョウは、関東地方10か所、中部地方2か所、九州地方1か所の合計13調査地で、3年間に少なくとも1回は記録されました。これらの調査地のうち、18年夏になって新たに記録された調査地が2か所、さらに18年に記録率が増加した調査地が5か所ありました。また、1か所は16年が0.4で17年が0.2と減少し18年には記録されませんでした。このように、3年間で記録率が徐々に減少した調査地もあったものの、ベランダバードウォッチでもガビチョウが生息分布を拡大したり、記録率が増加していることを示唆するデータが得られました。

なお、ホンセイインコは東京都の調査地で3年間に家および家の周りの調査地の合計7か所で記録され、ソウシチョウは四国の調査地1か所で記録されました。

### 最後に

以上のように、今夏の猛暑と住宅地周辺に生息する主要な鳥たちの生息状況との関係については明確な結果は得られませんでした。ただ、ムクドリのように同じ調査地で2年間のデータを用いて比較すると、個体数ランクの割合に明確な違いが得られたことも事実です。これが一部の調査地の記録によって影響された結果なのか、実際に生じた現象なのかを明らかにするには、さらに長期にわたって多くの調査地のデータに基づいて必要があります。また、家での調査による個体数指標の変動もさらに多くの調査地のデータに基づいてさらに長期にわたって調査を続ける必要があります。本報告で紹介したガビチョウの記録状況のように、住宅地周辺に生息する種も数年で変化することが示唆されました。特にガビチョウのように新たに生息するようになった種は、一時的に分布を拡大しても再び衰退することも

考えられます。実際に、住宅地周辺に生息する種のなかには、近年になって繁殖分布を拡大したり個体数が増加した鳥たちがいます。現在、本州各地の市街地周辺で繁殖しているハクセキレイは、1970年代になって関東以南で繁殖しはじめて以来瞬く間に繁殖分布を広げました。市街地に生息する最も普通のセキレイになってしまいました。さらに、ツミは1980年代中ごろに関東の市街地周辺で繁殖するようになりました。それ以前は幻のタカとして詳しい生態も知られていなかった鳥です。今後もツミやハクセキレイのように新たに市街地周辺に進出する種が現れるかもしれません。やはり、モニタリング調査は、調査地数と調査の継続が命です。2018年夏の調査は、新たな調査地が両調査あわせて44か所ありました。来年以降も少しでも多く継続して参加していただければ嬉しい限りです。

10月に入って、市街地でもシジュウカラ類やメジロなどの森林性の鳥たちが目に付くようになりました。また、あと半月もすればジョウビタキやシメなど冬鳥の便りが届くころです。今夏の異常ともいえる猛暑や

その後の台風の大雨は、冬の鳥たちの生息状況に何か影響するのでしょうか。引き続き冬の調査もよろしくお願いたします。

末尾ながら、以下に2018年夏の調査にご参加いただきました皆さまのお名前を記してお礼にかえさせていただきます。秋元玲子、荒井春寿、荒木廣治、石口富實枝、石坂あや子、石田健、石原渉、入船憲一、内田隼斗、江村千佳子、大出水幹男、大下怜莉、大塚啓子、大向あぐり、岡本美紗、加藤智子、加藤ななえ、加藤美奈子、川畑紘、canpro、菊池菊子、北野実々子、kittyhawk、黒沢令子、小荷田行男、小林俊子、小堀脩男、小松健太、佐藤司、佐藤留美子、猿子正彦、嶋田和明、白井瑛久、白石ひとみ、須田由美、瀬川和也、大門明美、大門聖、高橋 姿、高橋雅子、高橋佳子、高山裕子、武居佳子、竹内敦子、武谷由紀子、辰巳文吾、田中利彦、長嶋宏之、丹羽和夫、広友詞子、藤原淳子、古川紀美子、松平晶子、三田長久、宮崎朋子、安田耕治、山口めぐみ、山下弘樹、横山多加子、吉中康展、吉邨隆資、rain、渡邊ケイコの各氏。

とりまとめ：平野敏明

付表. 2018年夏の調査記録種一覧

No	種名	家	周り	No	種名	家	周り	No	種名	家	周り
1	キジ	○	○	33	オオジシギ		○	97	ジョウビタキ	○	○
2	オシドリ		○	34	タシギ		○	98	ノビタキ		○
3	オカヨシガモ		○	35	クサシギ		○	99	イソヒヨドリ	○	○
4	ヨシガモ		○	36	キアシシギ		○	100	サメビタキ	○	
5	ヒドリガモ		○	37	イソシギ		○	101	コサメビタキ		○
6	マガモ	○	○	38	ユリカモメ		○	102	キビタキ	○	○
7	カルガモ	○	○	39	カモメ		○	103	オオルリ	○	○
8	コガモ	○	○	40	オオセグロカモメ		○	104	スズメ	○	○
9	キンクロハジロ		○	41	コアジサシ		○	105	キセキレイ	○	○
10	カイツブリ		○	42	ミサゴ		○	106	ハクセキレイ	○	○
11	キジバト	○	○	43	トビ		○	107	セグロセキレイ	○	○
12	アオバト	○	○	44	ツミ		○	108	ビンズイ	○	○
13	カワウ	○	○	45	ハイタカ		○	109	タヒバリ	○	○
14	ゴイサギ		○	46	オオタカ		○	110	アトリ	○	○
15	ササゴイ		○	47	サシバ		○	111	カワラヒワ	○	○
16	アマサギ		○	48	ノスリ		○	112	マヒワ	○	○
17	アオサギ	○	○	49	クマタカ		○	113	ベニマシコ	○	○
18	ダイサギ	○	○	50	フクロウ		○	114	イスカ		○
19	チュウサギ		○	51	カワセミ		○	115	シメ	○	○
20	コサギ	○	○	52	コゲラ		○	116	イカル	○	○
21	クイナ		○	53	アカゲラ		○	117	ホオジロ	○	○
22	バン		○	54	アオゲラ		○	118	ホオアカ		○
23	オオバン		○	55	チョウゲンボウ		○	119	カシラダカ		○
24	ホトギス	○	○	56	チコハヤブサ		○	120	ミヤマホオジロ		○
25	セグロカクコウ	○	○	57	ハヤブサ		○	121	アオジ	○	○
26	カクコウ	○	○	58	サンショウクイ		○	122	クロジ	○	○
27	アマツバメ		○	59	サンコウチョウ		○	123	コジュケイ	○	○
28	ヒメアマツバメ		○	60	モズ		○	124	ドバト	○	○
29	ケリ	○	○	61	カケス		○	125	ホンセイインコ	○	○
30	イカルチドリ	○	○	62	オナガ		○	126	ガビチョウ	○	○
31	コチドリ	○	○	63	ハシボソガラス		○	127	ソウシチョウ		○
32	ヤマシギ		○	64	ハシブトガラス		○		記録種数	80	119